

佳作

髪の毛に希望を託して

宮城教育大学附属中学校

1年 浅野 千彩

私は、この夏休みに初めてヘアドネーションに挑戦しました。ヘアドネーションという言葉は、髪をばっさり切ろうと決意したタイミングで母から聞いて、初めて知った言葉でした。どういうことなのか母から聞き、自分でも調べてみたら、何年もかけて伸ばしてきた自分の髪が、遠い場所で病気と闘う誰かの役に立つかもしれないということを知りました。私にとって切ってしまうただのゴミになってしまうはずだった髪が、誰かにとっては大きな希望になるかもしれないという事実、正直驚きました。同時に、自分にも誰かのために何かできることがあるかもしれない、と思った瞬間、私の「髪を切りたい」という気持ちは、「誰かのために髪を寄付したい」という気持ちに変わりました。

今まで髪を伸ばすことは、簡単なことではありませんでした。毎日髪を結ぶことも、シャンプーの後のドライヤーにうんざりすることも何度もありました。ヘアドネーションという言葉を知らなければ、とっくに捨てられてしまったけれど、自分の髪が誰かの役に立つかもしれないと思うと、不思議と頑張ることができました。

そして、ついにその日がやってきました。美容室でヘアドネーションを希望していることを伝えると、担当して下さった美容師さんは、ご自身の体験を話してくださいました。その方は乳がんで退院したばかりで、幸い抗がん剤治療はしなくて済んだものの、健康であることのありがたさを痛感したこと。病院の美容室を利用し、病気の方々が髪を失くした時の切実な思いを聞いて、美容師として自分に何ができるのかを改めて考えたこと。それを聞いて、私は胸が苦しくなりました。ヘアドネーションについてよく知った気になっていましたが、自分の考えはあまりにも浅すぎたのです。病気は決して他人事ではなく、誰にとっても身近なものであることを実感しました。私が、私の大切な人がある日突然病気になることもあるのです。そして、ヘアドネーションのような活動が、どれほど大きな意味を持つのかを改めて深く考えさせられました。

今まで伸ばした髪にハサミを入れる瞬間は緊張しました。美容師さんがゴムでいくつもの束に分けた髪を1本1本丁寧に切っていく「ザクッ」という音とともに長かった髪が落ちて、少し寂しさも感じました。しかし、切った後の鏡に映る新しい自分を見ると、その寂しさはすぐに、清々しい気持ちに変わりました。まるで、新しい一歩を踏み出したようなそんな感覚でした。

家に帰り、改めて切った髪の毛を手に取りました。この髪が、ウィッグの作成を経て、誰かの髪となって、心に寄り添うことができる。そう考えると、自分の行動が誰かを支える「バトン」になったような気がしました。初めてヘアドネーションを知った時は、本当に自分の髪が役に立つのか、疑問に思う気持ちもありましたが、今はいつかどこかで、私の髪が誰かの笑顔につながるかもしれないと想像するだけで胸がいっぱいになります。

この挑戦を通じて、私は人との目に見えないつながりの温かさを知りました。そして、私にとって当たり前だった「髪」が、誰かにとっては大きな希望となり得ることを知りました。さらに、今回得た知識や経験を、ほかの人たちにも正しい情報として伝わるようにしなければいけないとも思いました。髪の毛の長さや、一つの全頭用ウィッグを作成するのに必要な量や資金、そこに込められたたくさんの人たちの思い。髪を寄付できなくても募金など、たくさんの人たちと協力することで、その輪が広がります。病気で苦しんでいる人たちも前を見て、同じ歩幅で歩いていけるのです。そんなすてきな世界になるように、私の経験を私の言葉で伝えていけたらいいなと思いました。

ヘアドネーションは、直接触れ合うことはなくても、誰かの心に寄り添う行動だと思います。そう気づかせてくれたこの経験は、将来の私を支える大きな財産になってくれると思います。私自身が普段の生活でも、人の気持ちに寄り添うことができるようにこの経験を生かしていきたいです。一つの小さな挑戦でも、誰かの大きな力になることを信じて。